

根付研究 最前線 『留具の発生と京』

根付の発生に考えをめぐらす時、二つの可能性が想起されます。一つは〈石や木片といった自然物から生まれた〉とする自然発生的な可能性、そしてもう一つが、これまで考察してきた通り〈ある時期にある人物によって、ある意図をもって用いられた〉とする人為的見いだされた可能性です。前者を否定することはできませんが、私の知る限りでは、絵画資料・文字史料ともにそれを確認することができません。対して後者は、それまでに描かれた絵巻物と同時代の風俗図を突き合わせることで、留具を用いて堤物を提げた、ある扱い手の層を浮かび上がらせることができます。ここで描かれる留具は、この後に「ねつけ」と呼ばれる留具とは、堤物を提げる際の小器具であることにおいて変わりありませんが、それが表象する社会性や形そのものも似て非なるものだと感じます。この堤物を身に着けた扱い手の層が、当時、京の市井を異様な風俗や行動をして騒がせた「かぶきもの」であったことは、これまで述べてきた通りです。そして、同様の時代相を背景に、四条河原において歌舞伎の源

公益財団法人 京都 清宗根付館
学芸員 大西 弘祐(忠雲)

流である「かぶき踊り」が誕生したのも周知の通りです。ともに市井では、異様・異端的なものとして受け取られましたが、ここに、かぶきものの華美な服飾の一つとして登場した(描かれた)のが、堤物を提げるための環の形をした小器具でした。もちろん、これ以前の絵巻物などの絵画資料に、これを描いたものは見当たりません。何故かぶきものが誕生したのかという議論にはここでは立ち入りませんが、しかし、かぶきものを市井で賑わせ、さらにかぶき踊りを誕生させた、換言するならば、これらを受け入れ、あるいは排除し、しかし結果的に「かぶき」を構造化させたこの場所こそ、留具を発生させた母体であるとも考えられなくありません。堺でも大阪でも、まして新興都市江戸でもなく、ここ〈京〉でかぶきのものは耳目を集め、その誕生に京という場が欠かせなかったのならば、京の文化や世相なくして、かぶき踊りの誕生が無かったように、あたかもかぶきの一つの表象であるかのような留具の発生も、ここ〈京〉が深く関わっていると考えるのも、あながち見当違いではないでしょう。

清宗根付館 便り

「根付を制作するワークショップ」など、特別な体験をご提供する企画を開催。

当館では、事前予約の団体のお客様にギャラリートークをしてまいりましたが、今回初めての試みとしてホテルとタイアップして、京都観光の一環で特別な体験をご提供する企画を開催しました。当館での限られた時間で彫刻の一端に触れていただこうと、実施場所や企画内容を検討してまいりました。ワークショップでは鹿角を四角や丸の札に成形して磨き、天然染料の茜で赤く染めたものを準備しておいて、それを彫刻刀で削り、図案を彫りだすという内容です。昨年の掛川市二の丸美術館では磨きと染めから削りまで行いましたが、今回はその短縮版となります。当日は根付作家の及

川空觀先生と佐川印刷株式会社メセナ事業室室長であり、根付研究家の大西弘祐氏も加わり、お客様をお迎えしました。及川空觀先生が制作された作品を実際に手に取っていただき、先生には根付の楽しみ方や制作の裏話まで多岐にわたる興味深い話に触れていただきました。さらに大西弘祐氏からは、根付の歴史や企業が担う文化活動の意義などを熱く語っていただきました。続いてワークショップでは慣れない彫刻刀を駆使して、家紋を彫られたり、桜や猫の図柄を彫られたりと、皆様が集中して作品を創作される姿が印象的でした。最後に根付の展示と武家屋敷をご覧いただき、約1時間30分の行

程が終了しました。お帰りの際には、それが思い出に残る作品を手にしながら「楽しかった。」とのお喜びの声をいただき、企画した私たちも嬉しく感じました。



2024年7月～9月の特別企画展のご案内

根付で楽しむ『文字がつなぐ根付の心』展

- 7月「根付しりとり」展 ■ 7月2日(火)～31日(水)
8月「SNS根付王座決定戦」展 ■ 8月1日(木)～31日(土)
9月「レトリックな根付たち」展 ■ 9月1日(日)～29日(日)

京都 清宗根付館 公式ホームページのTwitter、Instagramにて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第9回 水木十五堂賞受賞(奈良県大和郡山市より授与)、家庭画報(目次頁)に毎月掲載、NHKプレミアム「美の壺」出演

SAGAWA PRINTING



公式サイトはこちらから▶



佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。



SPRING ~ SUMMER Issue. 16

[目次]

- 企画展の見所
- 根付研究 最前線
- 根付館便り

[発行元]

公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地(壬生寺東側)
電話 075(802)7000
www.netsukekan.jp/



日本で唯一の現代根付専門美術館 京都 清宗根付館『企画展』のご案内

大胆不敵、だから面白い。『根付の面構え』展

顔は、感情を映しだす鏡ともいわれます。とくに人の顔は他の生物に比べて複雑かつ豊かな表情を持っています。また相手の表情を見るだけで、言葉を使わなくてもどんな感情を抱いているのか、どんな性格なのか、およそ感じ取ることができます。顔にはその人特有のアイデンティティが現れるものです。顔に関する言い方も様々あり、顔立ちは目鼻のつくり、顔つきと言えば感情まで含み、顔色と言えば健康状態、面構えと言えば力強さも意味します。根付でも表情豊かな顔が彫られ、雄弁に喜怒哀楽を物語り

ます。優しそうな顔、笑った顔、怒った顔、偉そうな顔など、根付という制限された大きさの中でも大胆不敵に堂々と主張してくる顔はまさに根付の面構えといった存在感があります。今回はそうした「顔」に注目した展覧会を特集します。

また顔という時、人だけでなく組織や文化の代表を指すことから、京の都と江戸にも焦点を当てて東西文化の顔を紹介します。「はんなりと雅」「粋と洒落」と題して、それぞれの気質が感じられる顔ぶれが勢ぞろいします。

だらしないふでま 大胆不敵、
だから面白い。
根付の
面構え展

Fearless, pompous, so funny
"Cool appearance of Netsuke"

4月『顔、かお、貌』展 Individual, unique, diverse Netsuke
4月2日(火)～30日(火) | April 2(Tue) - 30(Tue)

5月『はんなりと雅』展 Refined and Elegant Netsuke
5月1日(水)～31日(金) | May 1(Wed) - 31(Fri)

6月『粋と洒落』展 Smart and Stylish Netsuke
6月1日(土)～30日(日) | June 1(Sat) - 30(Sun)

公認
佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。

告知ポスター

4月

■ 4月2日(火)～30日(火)

「顔、かお、貌」展

花のかんばせといえば花のように美しい顔の形容ですが、温顔（優しい顔）、紅顔（美少年）、慈顔（慈悲深い顔）など、顔は人物のさまざまな性質を伝えるものです。古くから顔は個人の特定や個性を表すと考えられ、祭祀の際に仮面を着用することで神格を宿すように顔には不思議な靈力があると信じられてきました。また顔が広いとか、顔が利く、顔に泥を塗るなど社会的な立場を指すこともあります、顔は重要な判断指標のひとつといえます。根付でも顔は真っ先に目が行く鑑賞ポイントと言えます。人のみならず他の生物にも生き生きとした表情を与えるのも根付の特徴です。

千二百年の都が育んできた美意識と精神性

■ 5月1日(水)～31日(金)

「はんなりと雅」展

平安京の遷都（794）より天皇や貴族を中心とした雅な王朝文化が花開きました。江戸時代初期には京の都で華やかな衣装をまとった歌舞伎踊りで提げ物が使われ、その後根付は数寄人が好む装飾品として都市文化を象徴する顔となりました。京の都は貴族を中心に、江戸は武士や町人を中心とした異なる気風を育て『守貞謾稿（もりさだまんこう）』1837-1867には、「京坂は男女ともに艶麗優美を専らとし、かねて粋（すい）を欲す。江戸は意氣を専らとして美を次として、風姿自づから異あり。」と東西の美意識の違いを記しています。京都らしさを感じさせる上品で優美な根付を一堂に紹介します。

勢いと潔さに支えられた町人文化

■ 6月1日(土)～30日(日)

「粋と洒落」展

徳川治世によって泰平を謳歌した江戸は、前期は上方文化の影響があったものの、都市の繁栄によって台頭した町人を中心に独自の文化を結実させました。意氣（粋）で鰐背（いなせ）な江戸っ子たちが意地と面子を競った江戸の町。一日千両とうたわれた芝居や、吉原、魚河岸は活況を呈し、流行の発信地となりました。贅沢禁止令が何度も出されましたが、その度ごとに地味に抑えながらも機知に富んだ意匠や技巧に凝ることで、憂さを晴らす庶民文化が生まれました。錦絵や川柳、洒落本には庶民の生活や人情の機微が描かれました。そんな江戸の顔といえる威勢の良い面々を揃えました。



及川 空觀 (1968~)
「円満大王」 高4.4cm
朝熊黄楊

いつも恐ろしい形相で亡者の生前の行いを裁き、叱責する冥府の王として知られる閻魔であるが、ここでは大笑いした顔で円満大王となっている。



小野里 三昧 (1967~)

「投柿」 高3.8cm
黄楊・水牛角

『さるかに合戦』を題材にした連作の一作で、蟹をめがけて柿を投げる姿を作品にしている。ふてぶてしい意地悪さを感じさせる顔が見どころ。



和地 一風 (1970~)

「どなん」 高2.5cm
象牙

「どなん」は与那国島の別名で、島特産の泡盛の名にも冠している。島の花「ユウナ」を胸に、手には泡盛。猫は与那國の民謡からと。酩酊した顔が秀逸。



阿部 裕幸 (1952~)
「完全犯罪」 高3.3cm
象牙

お化けが泥棒をした。捜査の追手が来ようが一向に足がつかない。足のないお化けは完全犯罪を成し遂げてしたり顔。アッカンバーと舌を出す。



宮澤 彩 (1949~)
「恵比須様」 高4.0cm
象牙

えべっさんとも呼ばれ、商売繁盛や豊漁・豊作をもたらす神として親しまれる。福徳を呼び込む笑い顔で一層のご利益にあやかれそう。



岸 一舟 (1917~)
「羽衣」 高5.4cm
象牙

室町時代の京を舞台に、観阿弥、世阿弥のによって大成された能楽は、まさに京都の雅を象徴する。その中でも『羽衣』はひとくわ華やかな演目。



駒田 柳之 (1934~)
「想い」 高5.0cm
象牙

江戸中期に京阪の婦人のあいだではかんざしに髪を巻いた貝髷（ばいまげ）が流行した。意中の男からの手紙に想いを募らせている。



宍戸 潤雲 (1960~)
「宗旦狐」 高3.3cm
象牙

千家茶道の基礎を固めた千宗旦に化けた古狐は見事な点前を披露したという。ゆかりの相国寺には門前に宗旦稻荷を祀っている。



向田 陽佳 (1968~)
「一力茶屋にて」 高5.6cm
象牙

「忠臣蔵」の大石内蔵助ゆかりの一力茶屋。裾には「ひるあんどん」とある。遊び果て振りをする内蔵助に密書が届くが、果たして！



工藤 道齋 (1950~)
「祇園小唄」 高6.3cm
象牙

舞妓の着物に京都の美しい四季が散りばめられている。だらり帯を揺らしながら、おこぼ（履物）を鳴らして歩く姿には小唄が良く似合う。



黒岩 明 (1949~)
「キャンドルスピinn」 高7.1cm
象牙

冬季オリンピックの花形・フィギュアの感動を作品にしている。脚を180度以上に開脚して回転するキャンドルスピinnとの洒落。



森 哲郎 (1960~)
「粹な若衆」 高6.0cm
黄楊

江戸時代は新興都市の江戸では土木事業などで男手が多く必要とされた。そんななかで、粋で鰐背（いなせ）な男の美意識が高まった。



庄司 明幹 (1936~)
「助六」 高5.9cm
象牙

元禄の頃の風俗を模した「助六」は人気演目のひとつ。義侠の精神と洗練された身のこなしは「粋」な江戸っ子の具現化として影響を残した。



高木 喜峰 (1957~)
「多幸」 高2.8cm
琥珀

江戸庶民の味タコは「多幸」に通じ、足は八本の末広がり、吸盤は幸運も財運も吸い付けると親しまれた。今でも引っ越しタコの人気もの。



山本 伊多呂 (1961~)
「家守童子」 高3.7cm
黄楊

木造家屋が密集する江戸は火災が起きてもすぐ復興するエネルギーッシュな町だった。その秘密はこの家守童子のおかげかもしれない。